その石段は硬く冷たい

【難易度】：5
【期限】：平日5日（月曜〜金曜）、1日1シーン。
【雰囲気】：町の探索×高低差×怪奇スポット
【トーン】：PG12

【状況】

目標：大階段周辺で起こる怪奇現象の内容を調査してまとめ、発表しよう。

この町には急な傾斜の坂を上るために造られた、石造りの長い階段がある。七裡に住む人たちは、それを大階段と呼んでいる。他にも坂を上る道はあるのだが、どの道ももっと緩やかで長い距離をかけることになるため、かなりの時間がかかってしまう。そのため多くの住民が、急な傾斜にうんざりしつつも、大階段を登ることになってしまっている。

〔生徒〕の目的は、この大階段周辺で起こる奇妙な現象の調査と解明である。物語はあなた方が大階段の上がり口、つまり階段の最下段に集合するところから始まる。坂の上まで続く、長い石段の下、生徒たちは調査を開始する。

〔生徒〕は今、「♥A：大階段上がり口」にいる。【場所】の山札から「A」を除いておこう。

【今いる場所】と【問い】

「♥A：大階段上がり口」にいる。

「♥A：大階段上がり口」の説明を読み上げ、【演出】にみんなで答えよう。それが【問い】である。取材を始めることになったら、【調査】フェイズに移るが、そのまま「♥A：大階段上がり口」から開始する。【場所係り】は【現象】だけを引いて、何が起きるのか物語ろう。

♥【場所】

A：大階段上がり口

雨の日、傘を差しながら大階段を上っていた人が足を滑らせて落下したという事件が昔あったらしい。その人が叩きつけられたのがここだ。落下直後はまだかろうじて息があったが、病院に搬送された後、意識を取り戻すことなくこの世を去ったという。

【演出】：事件を想起させる痕跡は何かまだここに残っているか？

2：天蓋通り商店街

様々な店が立ち並ぶ商店街。八百屋、魚屋、花屋、雑貨店、和菓子店、蕎麦屋などが軒を連ねている。各店舗のひさしが長く、雨にぬれずに買い物ができるため、この名前がついた。地元の住人は縮めて「天蓋通り」と呼ぶことが多い。

【演出】：〔生徒〕がここで買ったものは何か。また、今後、札を引いて【手がかり】を見つけた時、この商店街であらかじめ買っておいたことにしてもよい。

3：喫茶モカション

コーヒーとケーキを主に出している喫茶店。人気のケーキはフルーツタルトとチーズケーキ。この店は大階段の上がり口にある程度近いため、奥にある窓際の席から大階段全体を眺めることができる。

【演出】：大階段を見ていたあなた方はどのような光景を目にするか。

4：斜面沿いの暗い路地

大階段の上がり口のそばにつながる形で、細い路地が伸びている。この路地は急な斜面のそばにあり、斜面の反対側には、古びた建物が建ち並び、路地の石畳の上に影を投げかけている。そのため、日中でも光が差し込むことは少なく、常に薄暗い雰囲気が漂っている。この路地を斜面沿いに歩いていくと、やがて大きな明るい通りに出る。一方、古びた建物の間に分け入っていく毛細血管のような道に入ることもできる。

【演出】：路地を進んだ〔生徒〕はどこに行きつくだろうか？　すでに行ったことのある【場所】から選ぼう。行き止まりで大階段上がり口に戻ってしまうこともありえる。また、【現象】の結果は路地の先にある「すでに行ったことがある【場所】」で起こっているとしてもよい。それをあなた方は路地から垣間見ているのだ。

5：中央図書館

一帯でもっとも大きな公立図書館。白壁と茶色の屋根の外観をした、わりと新しめの建物である。地区の中心部からやや外れたところに位置し、本棚には様々な種類の本が揃えられている。郷土資料が保管されている区画があり、また、当地の地方新聞のバックナンバーも揃っているため、調べものには便利である。一階には「ページターン」というレストランもあり、調べ物の合間に軽食を摂って一休みすることもできる。人気メニューは「今日のカレー」。

【演出】：どんな資料を探しにきたのか。

6：変色した手すり

階段の手すりは、古い鉄で造られている。他のところは問題ないのだが、一か所、錆びて赤黒い色に変色している。少し触ると細かい粒子が手のひらの中に残る

このちょっと上にある踊り場のところから勾配が緩やかになるのだが、ここはまだ勾配が急な地点である。下を覗いてみるとかなりの高さがあり、もし落ちたらと考えると、けっこうな怖さを感じる。以前、雨の日に階段から落ちた人が死んだという事件があったとのことだが、ここから落ちたのかもしれない。

【演出】：〔生徒〕たちはここで何か感じ取るか？　感じ取るならば、それはどのようなものか？

7：踊り場

大階段の真ん中にある踊り場。ここまで勾配が急なので、上がってきた人には良い休憩地点となっている。ここには古びた木製のベンチが2つ置かれているので、腰を下ろして休むことも可能だ。このベンチに座ると、眼下に広がる美しい景色を眺めることもできる。雨の日に階段から落ちた人が死んだという事件があったとのことだが、その人が足を滑らせたのは踊り場よりも下の方らしい。

【演出】：ベンチに座って、景色や、行きかう人々の様子を見ることができる。何か気がついたことはあるだろうか？

8：小さな石碑

大階段を登りきったところには、1mくらいの大きさの石碑が置かれている。石碑は苔むしていて、かなり古いもののようだ。何か文字が彫り込まれているが、雨に削られていて、彫りが浅くなっている。

【演出】：〔生徒〕は石碑の文字を読むことができるだろうか、あるいは写真を撮るなどするだろうか。

9：白樺ホール

大階段を上がりきったところの近くにある建物。白樺ホールは、古びた木々に囲まれた歴史を感じさせる建物だ。ステージを中心とする演劇用ホールに、コンクリート製の宿泊施設が廊下でつながる形で接続している。ホールの外観は、白く塗られた壁と、時を経た赤いレンガが特徴的で、落ち着いた感じの建築物になっている。敷地の入り口には季節の花で彩（いろど）られたアーチがあり、近くを通る人の目を楽しませている。

【演出】：大階段の方から気になる音が聞こえる。それは何か。どんな音か。

10：橋のある公園

大階段を上がりきったところの近くにある公園、静けさと自然の美しさが共存する場所だ。公園の入口には、歓迎するかのように木々が並び、石畳の小道はゆったりとした散歩やジョギングに最適だ。中にある小さな橋で飾られた池も趣深い。大階段ではない、もっと緩やかな坂道の方から上がってきて、ここで休憩したり運動したりして帰る者も多い。

【演出】：興味深い話をしている人たちの声を聞く。それはどんな内容か、話しているのはどんな人たちか。

♦【現象】

A
» 異常に冷たく感じる場所
» どこからか聞こえる足音
» 誰かに後ろから押される

2
» どこからか聞こえる悲鳴
» 犬が吠え、猫が威嚇する
» 撮影した動画に奇妙な影が映る

3
» 平衡感覚を失うほどのめまい
» 何かが転げ落ちる大きな音
» 半透明の人影

4
» 奇妙な音声が入った留守番電話
» 遠くに見える階段を上っている黒い影
» 誰かに強くつかまれたような痣ができている

5
» 背筋に感じる寒気
» 足を滑らせて転んでしまう
» 街灯や電灯が不規則に点滅する

6
» 突然降ってくる雨
» 段差に恐怖を感じる
» 死角になって上半身が見えないが、階段に誰かずっと立っている

7
» 疲れて脚が動かなくなる
» 突然感じる恐怖
» 誰もいないのに近くの自動ドアが反応する

8
» 近くの建物の階段で事故が起こる
» 写真を撮ったら身体の一部が写っていない
» 急に物が落っこちる

9
» なぜか１人多くいるものとしてカウントされる
» 握っていた手すりが壊れる
» 風の音の中に人の声が聞こえるような気がする

10
» いつのまにか靴に血がついている
» 打ち間違ったメッセージに、別の意味を感じる
» 近くにいた子どもが急に泣き出す

♣【手がかり】

A
» 何かが壊れた跡
» 大階段を描いた絵
» 紐が切れて落ちていたお守り

2
» 地元の歴史家のメモ
» 双眼鏡
» 奇妙なタイトルが付けられた音声データ

3
» 手のあと
» 大階段を舞台にした劇の台本
» 規則的に聞こえる物音

4
» 奇妙な刻印が刻まれている
» 犬が唸ったり、吠えたりする特定の地点
» この町の移り変わりを示す複数の写真

5
» くずし字判別用の事典
» 古いカセットテープ
» 授業で以前の学生が作った大階段についてのまとめ

6
» 大階段の上から見た町並み
» 一部分だけの変色
» 置かれた花束

7
» 望遠レンズ付きのカメラ
» 乾いた血の痕跡
» ネット上で見つけた書き込み

8
» 1枚の奇怪な写真
» 補修された跡
» 妖怪伝説について書かれた看板

9
» 監視カメラの映像
» 印がつけられた地図
» 過去の新聞記事

10
» 大階段作成時のことについて書かれた地域資料
» 幽霊に関する噂話
» 何か違和感のする足跡

♠【脇役】

A：松野 美希（まつの みき）

女性。40代前半。大階段そばで花屋を営んでいる。客の話に耳を傾け、注意深く観察することで、期待に応じた花を寄せることができる人物である。また、客が何を求めているのか、何について知りたがっているのかについて、常に好奇心を持っている。

「花束をご入用ですか？　予算と、あと何に使うかを伺っても？」
「この花束を買った方ですか？　覚えていますが、なぜそのようなご質問を？」

2：木村 昭二（きむら しょうじ）

男性。50代中盤。大階段の上がり口に近いところで、「モカション」と言う名前の喫茶店をやっている。社交的で、客との会話を楽しみながら毎日コーヒーを淹れている。人柄は良いのだが、わりと適当なところもある。

「夜の大階段は、ちょっと危ないよね」
「その話は耳にしたことはあるけど、途中までしか思い出せないんだよなぁ」

3：岡 陽介（おか ようすけ）

男性。大学生。写真同好会。趣味はカメラ。日常の瞬間を捉えるために、町中を歩き回っている。感性は鋭くないと思っていて、多くの写真を撮ることで補おうとしている。撮りすぎた写真の確認を忘れてしまうことも多く、その結果、奇妙な写真を撮っても見逃してしまうことがある。

「シャッター速度を速くしているからね、動きが速くてもバッチリ撮れるんだ」
「変な写真？　そういえば、奇妙な光が写りこんだ写真が何枚かあったような」

4：樋口 美紀（ひぐち みき）

女性。同じ中学校の2年生。美術部。大階段途中のベンチから眺める景色が好きで、その美しさを絵に表現しようと、よく大階段に行っている。流行りものに疎く、級友とうまく会話できない事を気にしている。

「この景色、どう描けば心に残る絵になるかな……」
「その人なら……見たことあります。あのあたりに……1人で立ってました」

5：吉田 浩司（よしだ こうじ）

男性。同じ中学校の2年生。サッカー部。体力作りのためのジョギングを欠かさない。公正なプレイを重んじ、対戦相手にも敬意を払う好人物だが、運動以外のことには興味がなく視野が狭い。

「幽霊って本当にいるの？　見てみたいけど練習があるからなぁ」
「ジョギングは毎日やってるよ。体を動かすことで、一日が始まるんだ」

6：清水（しみず） 香菜（かな）

女性。30代前半。公立中央図書館の司書。利用者に親切なことで知られている。知識が豊富で、さまざまなジャンルの本に精通していて、質問に的確に答えることができる。一方で働きすぎを心配されている。

「お探しの本はこちらの方ですね。他にもお手伝いできることはありますか？」
「図書館は知識の宝庫です。存分にご活用ください」

7：高橋（たかはし） 博人（ひろと）

男性。40代前半。警察官。法と秩序を守ることに尽力している。怪奇現象に関して懐疑的で、オカルト的な説明よりも合理的な解釈を求める。真面目な人物なので、〔生徒〕が夜遅くまで外にいるのを見つけたら、断固とした態度を取るだろう。

「怪奇現象だって？　証拠が見たいね。目撃談だけじゃ、風の噂と変わらない」
「君たちどこの学校かな。こんな遅くに出歩くのは感心しないな」

8：田中（たなか） 恵（めぐみ）

女性。30歳前半。主婦。地域の安全に強い関心を持ち、改善のため役所に陳情を行うなど、積極的に活動している。大階段の安全性について懸念を抱いており、その危険性を訴えている。

「今の大階段は危険です。自治体はもっと安全な環境を提供できるはず」
「地域の安全のため、改善を求める声を一緒に上げましょう！」

9：中島（なかじま） 香（かおり）

女性。20代前半。白樺ホールの清掃アルバイト。テンションがやけに高い時がある。小説家志望でいろいろネタを探しているため、出会い方によっては何か有益な情報を持っているかもしれない。

「この階段、不気味ですよねぇ。インスピレーションが沸いてくるなぁ……」
「こんなことが起きた原因について……ですか？　原因については興味ないんで調べてないですよ。オチは私が！　自分で書くべきものなので！」

10：渡部（わたべ） 真（まこと）

男性。大学生。中性的な外見と声をしている。タロウという柴犬を飼っていて、よく散歩している。タロウは大階段の近くに来ると、なぜか吠えたり唸ったりする。

「すいません、ここに来るとなんか唸っちゃうんですよね、ほら、タロウ行くよ」
「大階段について何か知っていることですか？　うーん…… あ、そういえば」